

九月の雷雨(2)

フリード・ランペ著
松川 弘・訳

(平成26年9月10日受付)

Septembergewitter(2)

von
Friedo Rampe

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Sep. 10, 2014)

「あの淡黄色の髪の毛、青いセーター、茶色いズボン。きつと奴に違いない」と、マルティンと並んで棧橋に腰を下ろしていたジョニー・シュテークマンは言った。「君はどうしてもやらなくっちゃ。嵐のエミールをやっつけたら、君の株は上がるぜ。奴が草地を抜け出すのをじっと見張ってるんだ。」嵐のエミールは、嵐を持った二人の少女からそれほど遠くない溝に飛び込んだ。マルティンは、彼の淡黄色の頭が土手の斜面から突き出ているのを見た。

「さあ、突進するんだ」と、ジョニーはせき立てた。「手遅れにならないうちに、前の板塀にいる仲間の誰か、とくにピップスに気づかれないうちに。さあ、行け。」

「ああ」と、マルティンはささやいた。「本当にいいのか？」
「行くんだ。」

「よし、じゃあやってみよう。」マルティンは、全身の力を抜き、心臓をドキドキさせ、ほとんど無我夢中で、水泳場の入り口に向かって走り、怒りにまかせ、死に物狂いで草地に走り出た。これはディッキーに自分の強さを印象づけてくれるに違いない。彼は泣きたかった。自分は水泳パンツしか身につけておらず、その姿で外を走り回り、嵐の紐を手にして草地に横たわる二人の少女に向かって走っていくんだから。幸いにも、嵐のエミールは彼に気づいていないようだった。彼は窪地に駆け込み、また身をかがめて走り出した。彼の足は石ころと藪で傷つき、血まみれだった。

ジョニーはピップスの尻を軽くたたいた。「待てよ、何か胡散臭いものが見えたぞ」と、ピップスが言った。

「いやいや、大したものじゃない」と、ジョニーは言った。「それより、グアテマラの切手だ。お前さん、この間一枚欲しいって言ってたじゃないか。交換してやってもいいぞ。」

「グアテマラの切手？ お前、持ってるのか？」

「今日、親父あてに手紙が来たんだ。滅多にあることじゃない。それに貼ってあったのさ。ヒンニ・ヴォーラーズに声をかけてもいいんだぜ。」

「まあ、ここにいろよ。」

「嵐のエミールを見張ってなくてもいいのかい？」

「今すぐには来ないだろう。それに、大体、ヤンが嵐のエミールと闘うんだよ。無駄骨折りさ。」

「分からんよ」と、ジョニーは言った。

「どれどれ。」ピップスは板塀から下りてきた。「グアテマラの切手を見せてくれ。ややつ、こりゃ見事だ。」

ティンマーマン氏は、木の香のムツとする食堂のカウンターの後ろに立って、カウンターの上に上げた新聞に身をかがめ、読んでいた。

「樹皮茸きの園亭での謎めいた殺人の続報。昨日、ある散歩者が偶然、園亭に近接した草地で、写真のような金の紳士時計を見つけた。マリー・オルフェルスを殺害した者が犯行場所でそれを無くした公算が大きい。古風な形態と分厚い作りの金の紳士時計で、文字盤には青い花の飾りがついており、十中八九家宝クラス。裏蓋には二つのラテン文字を組み合わせたA. M. というモノグラムが刻み込ま

れている。時計の持ち主、もしくは所有者を知っている者は、即刻警察に通報されたい。」

そのとき、ゲンドルム・フリッツェがどやどやと小屋に入ってきた。「こんちわ、ティンマーマン、ビールとキューメル酒を頼むよ。まったく蒸し暑いね。」彼はビールを一気に飲み干すと、続けてキューメル酒をあおり、口髭についた泡をぬぐって、ゆったりカウンターにもたれた。「もう犯人を捕まえたみたいなきさっぱりじゃないか」と、ティンマーマン氏は言って、新聞を指し示し、否定するように首を振った。

「ああ、これで俺たちは一步核心に近づいたんだ」と、ゲンドルム・フリッツェは言った。「解決までもうそれほど時間はかかるまいよ。」まるで自分が時計を見つけたかのように、彼は誇らしげに髭を搔き上げた。「どこかの罪のない散歩者が時計をなくしたのでないとしたら、カップルがやって来て、あの樹皮葺きの園亭のそばで突然いちゃつき合い、時計がぼろっと草の中に落ちたのかも知れんぜ。」

「あんたは大した探偵だよ。」ゲンドルム・フリッツェはにやにや笑った。「あの園亭のそばで、そんなことをしたことがあるんじゃないのかね。まあ、もう一杯ビールとキューメル酒を注いでくれよ。」

「風の糸切り犯、もう捕まえたのか」と、ティンマーマン氏は尋ねた。

「いや、まだだ」と、ゲンドルム・フリッツェは言って、のんびり浜辺の方を見やった。

「もうしばらくかかる。あの手口はどれも素人離れしてるよ。」

「畜生」とゲンドルム・フリッツェはいきり立った。「あいつはまったくずる賢い。小悪魔に違いなからうよ。」

「来た、来た！」藪のかげで見張っていたマルティンは熱狂した。だが、風のエミールは相変わらず動かず、彼の黄色いバサバサの髪がちらりと見えただけだった。マルティンが自分を見張っているのに、彼は気づいたのだろうか？ 少女たちは、何も知らずに、風揚げに夢中になっていた。

空全体が灰白色の雲の層で覆われていた。おどろおどろしい厚い黒雲が、中洲の端、土手や木々、軒の低い農家の背後に立ちのぼり、次第に広がり、空のほとんど半分を覆い尽くした。突風が次第に強まり、農場のまわりに生えた木々に情け容赦なく吹きつけ、柳の茂みを引っかき回し、風の泣き笑いの顔に襲いかかった。風は上空であっちへ行ったりこっちへ来たり、寄る辺なく漂い、激しく回転し、その尾は痙攣したように踊っていた。アンニが言った。「今すぐ風を降ろさなくちゃ。糸が切れそうよ。ご覧なさい。」

急に暗くなってきたわ。私たちだけよ、ここでまだ風を揚げてるのは。」「そうした方がいいわ。降ろしましょう」と、メータも言った。だが、そのときすでに、風のエミールは隠れていたところから這い出し、腹這いになって、背後からそっと少女たちに忍び寄っていた。マルティンは、がっしりした鼻、そばかすだらけの黄色いバサバサの顔、長く赤いまつげ、ギラギラした小さな青い目、茶色いビロードのズボン、青いセーターをはっきり認めた。彼は蛙のように手足をばたつかせ、小さなポケット・ナイフを手にしていて。それで風糸を切断するつもりの方だった。待て、こいつめ、捕まえてやるぞ。マルティンは溝から飛び出し、大声でわめきながら風のエミールに襲いかかった。「危ない、風のエミールが近づいてるぞ、気をつけろ、奴は風糸を切るつもりだ、そこをどくんだ。」彼は風のエミールの背中に飛びかかった。青いセーターが裸の体にチクチクしたが、マルティンはバサバサの髪の毛のいやな臭いをかぎながら、風のエミールの腕を地面に押しつけた。風のエミールは金切り声をあげ哄笑した。骨太で力がある彼は、マルティンを一突きで背中から払いのけ、一発食らわせると、マルティンの顔の前で小さなナイフを振り回し、その頬に裂き傷をつけた。血が流れた。メータは悲鳴をあげた。勝ち誇ったように嘲笑する風のエミールが、一瞬、彼女の方を見たとき、マルティンは彼の手を噛みついた。風のエミールはナイフを取り落とし、アンニがそれをもぎ取った。マルティンと風のエミールは改めて取っ組み合い、草原をごろごろ転がった。マルティンが叫んだ。「逃げるんだ。奴はあんたたちの風を壊すつもりだ。」少女たちは走り出し、泣き笑いの顔はその上をフラフラ飛んで、頭を気が狂ったように激しく揺り動かした。少女たちは走りながら叫んだ。「助けて！ 人殺しよ！ 助けて！」

仲間の少年の一人がその声を聞いた。それは、本来それを耳にすべきとんがり鼻の小さなピップスではなかった。彼は、板塀のそばで砂地に横たわり、グアテマラの切手を手にしてジョニーとおしゃべりしていた。その声を聞いたのは、ディディ・クーグラールだった。彼は、一番高い飛び板の上に立ち、水中に飛び込もうとしていた。「風のエミールが見つかったぞ」と、彼は叫んだ。仲間の少年たちのほとんどが水中にいた。風が流れを攪乱していた。白い波頭に逆らって泳ぐのは気持ちよかった。彼らは、激しく息を吐き、腕を大きく伸ばして浜辺に向かって泳いだ。ジョニーとピップスは飛び上がった。「風のエミールが見つかった。」たちまち、彼らは全員集合した。ディッキーだけが欠けていた。みんな板塀を乗り越えて、中洲を疾走した。ティンマーマン氏が戸口に出てきて、ゲンドルム・フリッツェに言った。「厚かましい奴らだ。いつも板塀を乗り越えては、裸で中洲を走り回るんだから。」ゲンドルム・フリッ

ツェは大腿で出て行った。「すぐ帰ろう。雷も鳴ってるしな。」

話に花を咲かせたカリジウスとディッキーは、岸辺からまた土手に上がってきた。カメルーンという地名がディッキーの胸中で暗く鳴り響いていた。今から彼はそこに向かうんだ。彼の部下として自分も行けたらなあ。そこには原生林があり、生活がある。そのとき、遠くから仲間たちの叫び声が聞こえてきた。草原を駆ける少女たちと暗い空中をフラフラ飛ぶ泣き笑いの顔、風のエミールと取っ組み合うマルティンの姿が目に入った。ピップスが飛んできた。「風のエミールが見つかった。来てくれ。」

「風のエミールだって」と、ディッキーは叫んだ。「行かなくっちゃ。済みません、カリジウスさん。一体誰がエミールとあそこで殴り合ってるんだ？」

「例のホルマンさ」と、ピップスは言った。

「風のエミールって誰だい？」と、カリジウスは尋ねた。「あとで説明するよ、ごめんなさい、さよなら、カリジウスさん。」

不動で短く拳手の礼をして、ディッキーもピップスと一緒に殴り合いの現場に急いだ。ディッキーが着いたとき、仲間の少年たちは二人をすでに引き離していた。彼らは風のエミールを強く羽交い締めにしており、エミールは唾を吐き、哄笑し、マルティンを憎々しげににらんでいた。引っかけ傷や噛み傷だらけのマルティンは、無言でエミールの前に立っていた。頬が血まみれだったが、マルティンは痛みを感じてはいなかった。そんなことを彼はまったく気にしていなかった。彼は誇らしげな眼差しをディッキーに投げかけた。言ってみろ、僕はこれでも意気地なしかい？

「彼が一人で、その少女たちの尻糸を切ろうとしていた風のエミールを捕まえたんだ。ここにナイフがある」と、ジョニーが言った。

「彼はエミールを取り押さえたんだ」と、ヒンニ・ヴォーラスが言った。

ディッキー、肩幅が広く丈夫な頭の大きくて強いディッキー、あの偉大なアキレスは、小さくて弱々しいマルティンの前に進み出て、手を彼の肩の上に置いた。「見事だ、ホルマン。」だが、彼はジョニーの方を振り返って言った。「お前が彼に言ったんだろう。」アンニとメータは、さらに近寄ってこの場面を観察していた。メータは尻糸を固く握りしめ、泣き笑いの顔は力強く空に揚がっていた。彼女はアンニにささやいた。「泣き笑いの顔をめぐすすべてのことが、途轍もなく人騒がせだと思わない？」

向こうからゲンドルム・フリッツェのどら声が聞こえてきた。「お前たちが裸でここを走り回っていたことを記帳しておこう。何という風紀の悪さだ。とても見習いたくないね。」

「記帳されるようなことは何もしてないよ」と、ディッキーは言った。「俺たちが風のエミールを現行犯で捕まえたことを、あんたは感謝してくれてもいいはずだ。奴が少女たちの尻糸を切ろうとしたナイフはここにある。」

「それじゃ、こいつがこの辺りを騒がせていた悪戯小僧か。おい、お前、両親はどこにいるんだ。一言言ってやろうじゃないか。」彼は風のエミールの腕をきつくつかんだ。「どこに住んでるんだ？」

「それは言えないね」と、風のエミールは無愛想に目を据えて言った。

「まあ、必ず聞き出してやるさ。一緒に来るんだ。一体どうしてこんな馬鹿なことをするんだ？」

「やつらは空に揚がるべきじゃない」と、風のエミールは不満げに言った。「だからやっつけるのさ。」

「ふむ」と、ゲンドルム・フリッツェは言って、気楽に笑った。「風が空に揚がるべきじゃないだって。どうしていけないんだ？」

すると、風のエミールは急に、いわくありげにゲンドルム・フリッツェを見上げ、何かを伝えようとして首を伸ばした。ゲンドルム・フリッツェが身をかがめると、風のエミールは勝ち誇ったようにささやいた。「物置小屋に行こう。風の死骸だらけだぜ。やつらはみんな、もうあえぐこともできないのさ。」

「その物置小屋に一度行ってみたいものだ。それじゃ、お前さんたち、急いで水泳場に戻るんだ。今度ここで出会ったら……」

「感謝してもらいたいね。俺たちはあんたの仕事を減らしてやったんだよ。」

「この小悪魔を捕まえるのが、俺の仕事だって言うのか。どうも気に食わんね。」

「それは何とも仕様がないう」と、ディッキーが言った。「今度も間に合わなかったようだね。」

「勝手に言うがいいさ」と、ゲンドルム・フリッツェは言う、風のエミールを連れて立ち去った。

また地平線で稲光がして、雷がごろごろ鳴り、風が柳の枝を揺すった。早く水泳場に戻らなくては。メータは大急ぎで尻糸を巻き、アンニは彼女が糸をかたづけるのを手伝った。「雨が降り出す前に家にたどり着けそうもないわ。」

「ホルマン、君にもう一度チャンスを与えよう」と、水泳場に戻りながらディッキーが言った。

「うん。」マルティンは堪えた。

「もちろん、試すだけだぞ。」

「分かってるよ」と、マルティンはささやいた。

「あれが八百長だってことは分かってる」と、ディッキーは言って、ジョニーを見つめた。「それでも、見事だったな。」

「あっ、稲光だ」と、ジョニーは叫んだ。雷鳴はますます

す激しくなり、近づきつつあった。

外濠の暗闇でも、稲光は青みを帯びて明滅していた。クリスティアン・ルンゲは、足取りを早めはじめた。彼はもうすぐ家に帰り着くところだった。彼は、突風に飛ばされそうになった帽子を押さえた。外濠の下部ではうつろな騒音が渦巻いていた。風が藪や木々を重苦しく引っかき回していた。木の葉のかたまりが激しく揺れ動き、ざわめきはじめた。そして再びうつろな静寂が迫ってきた。青白い硫黄の光と死んだように淀んだ水、木々や藪の灰緑色の影の波。丘の上の黒い屋根の風車小屋は、迫りつつあるものに驚愕しながら愚直に立ちつくし、茶色の翼を木々の上の黒い空に向かってこわごわ伸ばしていた。またしても蒸し蒸しした風が流れ、不気味に旋回し、雷光の瞬きと雷鳴の暗い連打がはじまった。クリスティアン・ルンゲは、衝動がみなぎりあふれてくるのを自覚していた。

暗い外濠の上を、ぼんやり白くほのかに光る大きな白鳥が一羽、飛んでいるのが見えた。白鳥は、羽を力強く振り、水面すれすれを飛びながら鳴いていた。丘の上の風車小屋から、茶色の髪の子供が出てきた。彼女は、白いブラウスと茶色のスカートを手につけた、ふっくらした柔和な少女だった。おそらく白鳥の甲高い鳴き声に引きつけられて、彼女は、大きな丸い目で白鳥を暖かく見つめながら、丘を芝生の方に下りてきた。葦が生えている壕端に行くと、彼女はかがみ込んだ。白鳥は大急ぎで泳ぎ寄せると、首を彼女の膝にのせ、そっと体をすり寄せてきた。彼女は優しく白鳥の羽をなで、目を閉じた。

クリスティアン・ルンゲは立ちつくし、少女と白鳥を、この穏やかで美しい場面を、渦巻く騒擾の中のこの寄り添い、愛撫、結びつきを見つめていた。彼はこの光景に深く没入し、誰かが彼の背後を急いで通り過ぎたことに気づかなかった。彼は少女と白鳥だけを見ていた。

そのとき、ルンゲの背後を通り過ぎて外濠を上っていったのは、ヘンリー・オルフェルスだった。彼は、姉のトルーデ・オルフェルスのところに行こうとしていた。彼女は、ずっと前から外濠の上にあるヨハネ修道院で暮らしていた。

高く盛り上がった古風な髪型の彼女は、青白い顔をして開いた窓辺に座り、庭と土手に見入っていた。外濠の向かい側の木々の間に白い市立劇場があり、その一室で誰かがリハーサルをしていた。夏季の休止期間が終わり、市立劇場は数日後に再開されるはずだった。ピアノに向かって『夏の名残の薔薇』を歌う誰かの声が、開いた窓を通して聞こえてきた。辺りが静かだったので、その歌声ははっきりトルーデ・オルフェルスの耳許に届いたが、風が起こり、そ

の声をざわめきの中に引きさらっていった。

ヨハネ修道院の庭では、白い仕事着のユンクハウス博士がバラのそばに立って、雨が降り出しそれらが駄目になる前に、花束を急いで摘み取ろうとしていた。彼のかたわらにシスター・ルーツィエが立っていて、彼のたくましい器用な手を見ながら『夏の名残の薔薇』を口ずさんでいた。「ありがたいことに、名残の薔薇じゃないね。今年もありあまるほどの出来だ。来年はもっとたくさん咲くだろうよ。」「ええ、すばらしい夏でしたね」と、シスター・ルーツィエは言う、伸びをし、手足を伸ばして、腕を後頭部に当て、体を揺すった。すると風が彼女のスカートをふくらませた。ユンクハウス博士はとりわけ美しいバラ、真っ赤なバラを摘んだ。シスター・ルーツィエの白いエプロンに小さな留め針を見つけると、彼はそれでバラを彼女の胸元に挿した。だがそのとき、ルーツィエは、トルーデ・オルフェルスが憂いに沈んだ顔つきで窓辺に座っているのを見ていた。彼女はささやいた。「オルフェルスさん、窓辺に座ってるけど、あれじゃまずいですわ。雷雨が通り過ぎたら、身にこたえるでしょうよ。あの時のこと、まだ覚えておられますわね……」

「ああ、気散じをさせなくちゃ」と、ユンクハウス博士は言った。「ノルテさんを連れてきて、相手をさせるってのはどうかな。二人はよく一緒にいるだろう。おや、オルフェルスさん、どこへ行かれるんです？」「姉のところですよ」と、ヘンリー・オルフェルスはあえぎながら答えた。「今ですか、雷雨が来そうだし、もう夕暮れですよ……」「話があるんです。」「先に延ばせませんか？」「いえ、是非とも話をしなくては。」「でも、今、彼女は調子が悪いんですよ。」「少しだけでいいんです。」「気をつけてくださいよ。」「わかってます。」「ヘンリー・オルフェルスは、もう遠ざかっていった。

「可哀想に、姉さんのことじゃ、彼もついてないね」と、ユンクハウス博士はシスター・ルーツィエに言った。

「ヘンリー、お入りなさい。『夏の名残の薔薇』の歌、聞こえるでしょう？」と、トルーデ・オルフェルスは言った。「ええ、すてきな歌声ですね。トルーデ、ちょっと話があるんです。」「トルーデは『夏の名残の薔薇』を口ずさんだ。だがそのとき、雷のゴロゴロ鳴る音が歌声ともつれ合った。「もう歌声は聞こえないわね。」

「トルーデ、聞いてください。尋ねたいことがあるんです。メツラーって誰だかご存じですか？ 何がマリーと彼の間にあったんです？」「メツラーですって？」「ええ、メツラーとは誰です？」トルーデは、ぼんやり窓台を見つめていた。また稲光がし、雷鳴がとどろいた。風がカーテンをふくらませた。「もうすぐよ」と、トルーデは言った。「す

ぐに始まるわ。体中で感じるの。」「メツラーって、一体誰なんです、トルーデ？」「彼女はライブチヒの音楽学校で彼と一緒にした……。すごいわ。風が木々に吹きつけ、たわめ、揺すってる……。始まった、始まった。」「分かっていますよ。それで、マリーは彼とどんな関係だったんですか？」「誰とですって？」「もちろん、メツラーとですよ。」「そうだったわね。彼は最初、すらりとして、華奢で、物静かでした。それがだんだん太り、陰鬱で無愛想になったのね。だからマリーは彼を好かなくなった。分かるでしょう。そこに、優雅で賢く、見栄えがするあのカリジウス少尉があらわれた……。」「なるほど、シュテーンケンの店にいた、あの太って無愛想な男がメツラーか」とつぶやくと、ヘンリー・オルフェルスは言った。「今日、メツラーがマリーに宛てて書いた手紙を見つけたんです。彼は、もう一度樹皮葺きの園亭で話し合いたいと書いていました。」「樹皮葺きの園亭ですって」と、トルーデは言って絶句した。「これです。とにかく読んでご覧なさい。」トルーデは手紙を読み始めた。彼女は、文面を読んで理解することが難しそうに見えた。嵐のせいで彼女は神経質になり、取り乱していた。彼女はうつろに、放心したように彼を見つめた。「もう一度話し合いたかったのね。かわいそうな人。マリーはあの人をひどく苦しめたもの。」「かわいそうな人だ」と、ヘンリーは叫んだ。「彼だったんだ。彼がやったんだ。」「彼が何をしたの？」「トルーデ、恐ろしいことです。」「一体何です？」「トルーデ、まあ聞いてください。」「何があったの？あなたは何を言おうとしているの？一体どういうことなの。まあ、雷が鳴って、風の音がする。雨が降り出したわ。」「これですべてが明らかになった」と、ヘンリー・オルフェルスは叫んだ。「全部分かったぞ。シュテーンケンの店にいたあの太った男、手紙、時計、A. M. のイニシャル……。さよなら、トルーデ。行かなくて。なるほど、そういうことだったんだ。」ヘンリーは部屋から駆け出した。トルーデは叫んだ。「そうよ、すべてが明らかになるわ。」彼女は、バルコニーに出るドアを開けた。白いモスリンのカーテンが翻った。彼女は手すりに歩み寄った。風が出て、稲光がし、雷が鳴っていた。大粒の雨が、彼女の顔とうすいブラウスになま暖かく当たり、彼女の髪型を台無しにした。黒い髪の房が風にはためき、彼女は腕を広げて深呼吸した。それから彼女は、バルコニーから庭に向かって、堤防に向かって、嵐の混乱に向かって、『夏の名残の薔薇』を歌い出した。彼女は笑っていた。

雷雨が音を立てて町や草地、川の上に降り注いだ。重苦しく垂れ込めた雲の腹がはじけ、雨が庭や屋根の上に降り注いだ。エギディア教会の塔の周囲で稲妻が光り、墓地の花は押しつぶされて地に倒れ伏した。祖父は窓辺に立ち、

心配げに花を見つめていた。風が川船の帆を揺り動かし、ばんばんに膨らませ、汽船の煙突から出た煙を吹き飛ばし、通りに吹き込んだので、ほこりが舞い散った。風は開いたガラス窓を閉じ、カラスをきしませた。町は蒸し暑く、息苦しく、静かになった。だが、今度は雷鳴がとどろき、雷雨が音を立てた。笑い、叫び、歓声、ティンパニーとシンバルの響きが空中に噴出した。トルーデ・オルフェルスは、髪の毛を風に吹きなびかせながらバルコニーに立って、歌い、大いなる混和を感じていた。波打つ暗い壕の白鳥は、身を起こして羽ばたき、首を伸ばして鳴いていた。ティンマーマンの水泳場にいた少年たち、ディッキー・ブレントと彼の仲間たちは、飛び板から頭を下に飛び込んでいた。波が踊り、泡立ち、彼らは激しく息をしながら叫び、腕を伸ばした。マルティン・ホルマンは、雨の中、岸辺に静かに座っていた。彼は血の気が無く、疲れ、打ちのめされ、引っかけ傷をつくってはいたが、幸福だった。彼は仲間を迎え入れられたのだ。

カリジウス少尉の中隊は中洲を行進し、兵舎に戻ろうとしていた。兵隊たちはきりりとしており、雨に打たれ緊張した顔で行進歌をさえずり、カリジウス少尉は少し後を歩いていた。稲妻が雲の袋を鋭く寸断したに違いない。人々がビクトリア湖の前の芝生の上でコーヒーを飲んだりお菓子を食べたりしながらうつろぎ、ヴェールビーアの軍楽隊が野外音楽堂で演奏していたスイス館前の市民公園では、大騒ぎが起こっていた。人々がスイス館の閉鎖された木造のベランダに押し寄せ、ボーイたちはテーブルの間を右往左往して、テーブルクロスをはぎ取り、食器を運び去った。野外音楽堂の楽士たちは、この騒ぎをのんびり見ていた。墓碑の彫刻家、ジェノバ出身のロダーニ氏は、歯医者で歯根の炎症の治療を受け、白い鉄の椅子にもたれかかっていた。頭のところで器械が鳴動し、彼はかすかにうめき、黒い目を瞬きさせながら、天井を苦しげに見つめていた。彼がこうして治療を受けている間、家では、息子のアルベルトが、部屋で一切切切を大急ぎで荷造りし、雨の中を港に向かって駆けだした。港では、重い貨物を一杯積んだトスカ号が埠頭で煙を上げ、出港の不安に震えていた。雨が音を立ててまっすぐに、強く降り、茂みや木々は生氣を取り戻し、大地は湯気を立て、雷鳴は次第にかすかになり、遠ざかっていった。ホルマン夫人は相変わらず部屋の窓辺に立ち、庭を見つめていた。大粒の雨滴が窓ガラスを伝わり落ち、彼女の背後では、死者の衣服が入った衣装棚が開けっ放しにされていた。何かが彼女の中でうずき、青白い顔の彼女の口が震え、強ばりが解けて、涙が彼女の頬を伝った。メータ、幼いメータもまた、ティンマーマン氏の薄明りい食堂ですすり泣いていた。雨があの泣き笑いの顔を台無しにしてしまったのだ。風はエミールの破壊の脅威を幸いな

ことに免れたが、今度は雨がそれを駄目にしたのだ。顔の色はほやけ、洗い流され、紙は引き裂かれ、髪は床に無惨な姿をさらしていた。アンニがそばに立ち、ティンマーマン氏は彼女たちに言った。「また作ればいいさ。」

「おじさん、こんなのは二度とできないわ。」

そして、クリスティアン・ルンゲは玄関に立ち、帽子と袖から雨滴を振るい落としした。小柄で、いささか生気がなく、皮のように堅い肌をして、鼻の下にうっすら口髭を生やした妹のミンナが、部屋の中から見つめていた。「とにかく着替えなさいよ。」「いや、かまわないでくれ」と、クリスティアン・ルンゲは言って、書架のたくさんある仕事部屋に入った。窓が閉まったままで、空気はむっとしていたので、クリスティアン・ルンゲは窓を少し開けた。すると風が、新鮮な木の葉の香りがなだれ込んできた。外が土砂降りの間、彼は書き物机に向かって、大あわてで紙に言葉を次から次へと書きつけていた。「薄明かりの部屋でレダがお産の床についており、かたわらの揺りかごで双子のカストルとポリュクスが眠っていたある日、年老いた乳母がやってきて、彼女の上に身をかがめた。まだ青白くぐったりしたレダは、少しくッションから身を起こし、乳母に耳打ちした。「この子たちは彼の子供ではないのです。メナンドロスは何も分かっていません。何という夏だったのでしょうか。すべてを理解することは私には無理でした。どれほどのことを私は一度に理解できたでしょう。公園に行くと、果実が葉の間から柔らかな光を放ち、私に食べてくださいと言わんばかりにひとりで落ちてきました。茂みは官能的にさやぎ、青々したポプラの葉がかすかに身震いしながら降りそそぎ、夕焼けがあたたかく流れました。黄色い穀物畑を通っていくと、うねりやさやぎ、ささやきが私を取り巻き、快樂が、美しく柔らかな夏の雲、愛撫するような大気、揺らぐ影が私をとらえて気を失わせました。月光が柔らかく公園に流れたとき、私は静かな池に向かい、体を冷たい水に浸しました。私の肉体、水、池の薔薇が白い微光を放ち、柳の木の下で暗い土手に座って足を流れに浸していると、一羽の大きな白鳥が近づいてきて、私の膝に寄り添い、頭を私の手に載せました。夏はますます満ち、大気が動揺し流動しました。音楽が、重く甘美な和音、消耗性の著しい和音が聞こえるような気がしました。頭と四肢が痛くなり、私は公園に向かって走り出しました。私は、自分が何をしようとしているのかわかりませんでした。灰色の雲が梢の上に押し寄せ、風が、湿っぽい風が私をあちこちに引きさらいました。部屋にいても、毎晩私は眠れなくなりました。黒々とした木々がざわめき、窓の前で、大きな鳥の羽ばたきや長い、嘆息し誘惑するような叫びが聞こえるような気がしました。

それから、雷雨と嵐の夜が、青白い光と飛び交う影をともなってやってきました。木々はかき乱され、群がる雲は青黒く脅かすように空を覆い、すべてが渦巻き、混ざり合いました。一瞬、息詰まるような静けさが漂いましたが、生暖かい雨が急に降り出し、風が窓を打ち、私は、膝からくずおれてしまいました。そのときなのです。大きな羽音をたてて梢を越え、稲妻に取り巻かれ、ほのかに輝きながら、あの白鳥がやってきたのは。」

「オルフェルスさん、一体ここで何をしてるんです」と、シスター・ルーツイエは叫び、こわごわ彼女の肩を揺すった。だが、トルーデは身じろぎもしなかった。彼女は、頭を抱え込むようにしてバルコニーの手すりに寄りかかり、その体は手すりからずり落ちそうになっていた。濡れた髪の毛の房が額と背中にかかり、ブラウスはびしょ濡れだった。「彼女、どうなされたの」と、ハンニ・ノルテは尋ねた。彼女は二十五歳だが、いまだにお下げ髪で、大きな白いリボンをつけていた。丸ぼちゃの彼女は、いつもは陽気だが、今は、大きなボール箱を提げたまま、考え込んで立ちつくしていた。「手伝ってください」と、シスター・ルーツイエは言った。彼女たちは、トルーデ・オルフェルスを引っ張り上げた。彼女は、薄目を開けたまま背負われ、そのままベッドに寝かしつけられた。「トルーデさん、カード・ゲームをしましょうよ」と、ハンニ・ノルテは言った。「それは駄目ですよ」と、シスター・ルーツイエは言って、トルーデの濡れた衣服を脱がせ、寝間着を着せた。彼女はトルーデに毛布をかぶせ、彼女の黒髪を撫でた。「ともかくお眠りなさい。」トルーデは目を閉じたまま無言でうなずいた。死ぬほど疲れ果てた彼女は、すぐに眠り込んだ。「寝ぼすけさんねえ」と、ハンニ・ノルテは下唇を突き出しながら不満げに言った。「やっぱり、カード・ゲームがしたいわ。」「おいでなさい」と、シスター・ルーツイエは言って、彼女をそっと戸口から押し出し、静かにバルコニーに歩み出した。

雷雨が過ぎ去って、今は木々から水滴がしたたり落ちるだけだった。灰色の空はほんのり明るくなり、土手にも日が差し始めた。レーンを球が転がるような雷鳴もやんだ。大気は清々しく、木の葉や芝生、花のにおいがした。庭の芝生や濠から霧がかすかに立ち昇り、白鳥や茂み、木々を包み込んだ。点いたばかりの街灯の光がむせぶように浮かび、上手の椽の木々の間で白っぽく輝き出した市立劇場から、女性の歌声がまた聞こえてきた。「ティターニアが降りてきた。」その声は清々しく、明るく軽やかで、頭上の暗い雲の縁でまたたく星のようにくっきりしていた。シスター・ルーツイエは、幸せそうに、清められた大気を深く吸い込んだ。ユンクハウス博士がくれたあの鮮紅色のバラ

がまだ彼女の胸元に挿してあった。すべてが明らかになった、さっきあの仰々しい男はそう言った。それは確かだ。雨滴が静かにしたたり落ち、真っ暗な部屋から、トルーデの寝息が穏やかに、規則的に聞こえていた。シスター・ルーツイエは、手をたっぷりした肉付きのバラに当て、それを胸に押しつけた。バラの花は押しつぶされ、彼女の指の間でくしゃくしゃになった。

鋭いガチャンという音がした。皿洗いのスージーは、コップが割れて飛び散るのを見て、それを急いでかたづけ、捨てようとしたが、もうメツラー夫人が彼女の方に歩み寄っていた。「スージー、またコップを割ったのね。」「そうじゃありません。初めからひびが入ってたんです。」「そんな言い訳は聞き飽きたわ。もう我慢できない。ちゃんと仕事をしないのなら、ディルクセンさんに言いつけるからね。」

メツラー夫人が頭を振りながらそっぽを向いたので、スージーは料理女に向かってニヤニヤしながらこっそり舌を突き出した。騒ぎは幾分収まった。雷雨がスイス館から客を追い出し、夕食の時間も近づいたので、その多くは家路についていた。外の様子を見ようと、メツラー夫人は窓辺に歩み寄った。ボーイたちは残って、テーブルや椅子を拭いたり、テーブル掛けをまた掛けたりしていた。人々はベランダから出てきて、もとの席に戻った。何と清々しい大気。ヴェールビアの軍楽隊は、飛び跳ねるような陽気なポルカを演奏し、白い電球がともし始め、椽の緑の中でやわらかく輝いていた。

老ボーイ長のヴィリーが厨房にやってきた。彼は小柄で、長い腕を猿のようにブラブラさせ、顔も猿に似ていた。ポマードをつけた髪を真ん中で分け、しわだらけで、善良そうな茶色い目をしていた。彼は新聞を小脇にかかえていた。「ここはかなり暗いね。」

「ここで目を痛めたって、ちっとも構わないさ」と、料理女は言った。

「嫌みを言う前に」と、メツラー夫人は言った。「スージー、灯りをつけたらどうなの。」スージーがスイッチをひねると、冷たい硬質の光が、白いタイル張りの壁やむき出しのテーブル、大きなレンジ、壺や食器を照らし出した。

「ゲオルクは外ですわってるよ」と、ヴィリーは言った。「あの子何か言ってる？」

「話もせずに、ぼんやりすわってるだけだ。」

「ちょっと行ってみようか」と、メツラー夫人は言った。

「えへへ。」スージーが彼女の真似をした。

「お互いに気恥ずかしいんだ」と、ヴィリーは言って、猿のような目で悲しげに彼女を見つめた。

「新聞を見せてよ」と、料理女は言って、彼の小脇から

それをもぎ取った。

「やれやれ、鬼の居ぬ間の洗濯かい。」

「その通り」と、料理女は叫んで、新聞を振り回し、ヴェールビアの音楽に合わせて、ポルカのステップで厨房中を踊り回った。

「夜ほとんど家にいられなくて、ほんとに悪いと思ってるわ」と、メツラー夫人は言った。「あなたがきちんと食事を取るように、私ももう少し気を配らなくちゃいけないわね。このところ、ちゃんと食事を取ってないでしょう。口に合わないの？」

「いいや、おいしいよ」と、メツラー氏は不機嫌そうに言った。

「何も食べてないわ。きのうは美味しいレバーペーストに全然手をつけてないし、濃いミルクにも口をつけなかったでしょう。よくないわ。ハエ帳の中にまだイワシ缶とアスピックがあります。せめてそれでも食べてみたら。それとも、何か他のものを用意しましょうか？」

「いいや、放っておいてよ。大丈夫だから。大したことじゃないよ。」

「食事は大事です。どこか具合でも悪いの？」

「しつこいなあ、大丈夫だと言ってるじゃないか。」

「いつからそんなに突っ慳貪になったの」と、メツラー夫人は言った。「分からないわ。あなたはいいご身分なのに、それでも不満なのね。」

彼女は息子が腰を下ろしているテーブルのかたわらに立っていた。格子縞のテーブルクロスの上にビールのグラスが、脇の椅子の上に堅い帽子が置かれていた。彼の顔はぼんやりした明かりの中で白っぽく輝き、彼の小さな黒い眼は、テーブルや人々を越えて湖の方をぼんやり見つめていた。ミルクのようなもやが湖上を漂い、恋人たちが乗ったボートが数隻、静かにもやの中を進み、湖のまわりには市民公園の木々が黒々と無言で立ち、岸辺のニンフやトリトーンの彫像はくすんで木々の中に溶け込んでいた。ヴェールヴィーア軍楽隊の一人が立ち上がり、舞台上で言った。「今度は、オペレッタ『乞食学生』のポプリを演奏いたします。」それから彼は、トランペットを口に当てて吹き始めた。彼の独奏で、トランペットと彼の襟の金モールが薄明の中、金色に輝いていた。トランペットの響きは鋭く、長く引き延ばされ、ゆったりした夕べの静寂をつんざいた。彼は自分の席に戻ると、訴えかけるように吹き続けた。「肩に口づけしたただけだった。」多くの人々が歌詞を口ずさみ、小さく口笛を吹き、体を揺り動かした。メツラー氏は苦笑した。「肩に口づけしたただけだった。残念至極だ。」

「おやめなさい」と、メツラー夫人は言った。「みんな

がみんな、あなたみたいに上手に弾けるわけじゃないのよ。」彼女は突然、ゲオルクの誕生日のこと、彼に贈るつもりらしい時計のことを思い出した。「お父さんの時計はまだ見つからないの？」

「まだだよ」と、メツラー氏は言った。「また始まった。あれは無くしたんだよ。それがまずいの？」

「別にまずくはないけど、ちょっと知りたかっただけよ。気にすることはないわ。」彼女は、ゲオルクの幅広い肩を励ますようにたたき、軽く彼の体を揺すった。「置き忘れや物忘れじゃ、あなたは誰にも負けないからね、このぼんやり屋さん。」

トランペットが鳴り響き、霞がたなびき、黒々した木々の上に、大地から血を吸い込んで真っ赤になった大きな月が昇った。

祖母は再び、ホルマン夫人の部屋のドアをノックした。「ルイーゼ、お聞き。」だが、中では物音ひとつしなかった。「ルイーゼ、マルティンがまだ帰ってこないんだよ。」しばらくは静かだったが、ドアが開かれ、ホルマン夫人がぼんやりと影のように敷居の上に立った。「マルティン？ あの子はどこにいるの？」「あの子は水泳に出かけたままさ。」「水泳？ とっくに戻ってきてもいいはずね。」「あの子の身に何も起こってないとしたらね」と、祖母は言った。「雷雨があったでしょう。」「私は、あの子がいつもティンマーマン水泳場に行くのが気に入らないんですよ」と、ホルマン夫人は言った。「庭で遊んでればいいものを。」「あんたがあの子のことを構わないから、自分のことにかまけているから、あの子はティンマーマン水泳場に駆けていくんですよ。あの子にはこの家の居心地がよくないんです。」「でも、あの子はきっとすぐに戻ってきますわ」と、ホルマン夫人は言った。彼女は暗い廊下を横切って前の部屋に入り、窓越しに通りを見、窓を開けて身を乗り出した。通りは人氣が無く、うす暗く、街灯がぼんやりと湿ったもやの中に光っていた。

「いくら何でも、あの子がまだ泳いでいるはずはないわ」と、ホルマン夫人は言った。

「どこかに隠れてるのかも知れない」と、祖母は言った。「あの子へのあんたの仕打ちは、考えただけでもぞっとするよ。あの子はきっと、もう家に帰りたくないんだ。」

「あの子に、私、何もしてませんわ」と、ホルマン夫人は言った。「マルティンったら、どこにいるのかしら？」

そうだ、マルティンはどこに行ったのだろうか？ リュールセン造船所のドックに、古い廃船が一隻横たわっていた。装備をすべてはずされた古い鉄の箱で、ずいぶん前からそこに置かれていて、黒い鉄板は錆に侵されており、片側は

すでにその半ばが取り外され、肋材が飛び出していた。船腹の下部の朱色はまだうっすらと輝いていた。この時間、リュールセン造船所はひっそりしていた。労働者たちは仕事じまいしていたが、船腹から聞こえてくる、うつろでこもった話し声は一体何だろう？

それは、ディッキー・ブレントと仲間たちだった。彼らは、船腹の錆びついた壁の間で、ディッキーを半円形に取り囲んで立っていた。マルティンはディッキーの前に立っていた。少年たちがかけた松明が揺らめき、血のように赤く燃え立った。ディッキーが言った。「みんな、今日じっくり考えてみたんだ。ホルマンがあんなに立派にふるまったのに、彼を仲間として受け入れないのは卑劣だと思う。彼は万事、賢明に、慎重に行動したので、彼にオデュッセウスの称号を授けたい。賛成するかい？」

「賛成すると、オデュッセウス万歳！」

「それじゃ、儀式を始めよう。ジョニー、ナイフをくれ。ピップス、杯を取ってワインを注いでくれ。マルティン、袖をたくし上げて右腕を上げるんだ。」

とんがり鼻のピップスは、隅の暗がりに駆けて行って、肋材の後ろから、舞台上騎士が使うような古びた鉄の杯と赤ワインの瓶を取り出した。これらは、ずっと前に彼が家からくすねてきたものだった。彼は杯に赤ワインを満たし、ディッキーに歩み寄ってその杯を渡した。マルティンは、やせた腕の袖をたくし上げていた。

「俺の言うとおりに唱えるんだ」と、ディッキーは言った。

「死ぬまで仲間へ忠実であることを誓う。」

「死ぬまで仲間へ忠実であることを誓います」と、マルティンは小声で言った。

「勇敢であることを誓う。」

「勇敢であることを誓います。」

「嘘を軽蔑することを誓う。」

「嘘を軽蔑することを誓います。」

「すべての俗物を憎むと誓う。」

「すべての俗物を憎むと誓います。」

「彼らを断固追及することを誓う。」

「彼らを断固追及することを誓います。」

「あらゆるスポーツを習得することを誓う。」

「あらゆるスポーツを習得することを誓います。」

「ギリシア人のように体を強健にすることを誓う。」

「ギリシア人のように体を強健にすることを誓います。」

「これらが真実であり、君がわれわれの血盟に受け入れられたことの証に、マルティン・ホルマン、君の腕をナイフで切り、君の血を杯にしたたらせる。われわれは全員、それを飲む。」ディッキーはナイフでマルティンの前腕を切り、ワインの杯を傷口に当てて、血を垂らした。

仲間たちの合唱が響き渡った。

「死ぬまで仲間に忠実であろう、だからこそ、この杯で真っ赤な血とワインを混ぜ合わせるのだ。」

緊張のあまり真っ青になり、興奮で震えながら、マルティンは松明の光の中で立っていた。彼は、自分の血が流れるのを見、歌声を聞いていた。それから彼は、ディッキーがまず杯を口にするのを見た。杯は、次々に回し飲みされていった。背後でドラムが連打された。船体の穴を通して、外の景色が見えた。霧の流れる岸辺と薄暗い川面、草地や中洲の向こう、川の対岸、ティンマーマンの真っ暗なバラックの向こうに、もやの中から、赤くて丸い月が昇っていた。杯が、またディッキーの手に戻ってきた。彼はそれをマルティンに差し出した。「さあ、賢明なオデュッセウスよ、君も飲むんだ。」

マルティンは、震える手で古い杯を受け取り、飲んだ。鉄と血、ワインの味が強くした。マルティンは目をまわした。この日、彼が味わわねばならなかった興奮、悲嘆、歓喜は、多分彼にはあまりに大きすぎたのだ。彼は、鋼の床に倒れ込んだ。

園亭の内部はだんだん暗くなってきた。「ドーラ、ランプを取ってきてくれ」と、祖父が言うと、ドーラは家に戻り、点火した石油ランプを手にして帰ってきた。彼女は墓の間を通り抜けたが、ランプの黄色味を帯びたあたたかい光が、彼女の生真面目で穏やかな顔を照らしていた。墓に供えられた花は、憧れに満ちた甘い香りを放ち、もやがランプの周囲に漂っていた。ドーラは思った。アルベルトがもうすぐやってくる。小屋の裏で、彼の巻き毛をかき乱し、彼の口づけを味わうんだ。彼女は、自分の腰に回される彼の力強い腕を感じていた。

「お前たちは、大きな危険を冒したんだよ」と、祖父は言った。「あの風のエミール、奴は小さなならずに違いない。」「ええ、彼の髪は黄色で、叫ぶことだってできるのよ」と、メータが言った。彼らは、住居の筋向かいの墓地の壁近くにある園亭の中で座っていた。ドーラは、ランプをテーブルの上に置いて言った。「さあ、食事を続けて。でも、おしゃべりは駄目よ。」「そうだ、もう少し落ち着きなさい。そんなにおしゃべりしていると、あとで興奮して寝られないぞ」と、祖父も言った。「ごらん、月が木々の間で静かに、穏やかに輝いてるよ。」だが、メータとアンニはちらっと目をやっただけだった。彼女たちは、この日の出来事にまだ興奮しており、相変わらず、風のエミールやマルティンの英雄的行為、雷雨、雨に打たれて台無しになった泣き笑いの顔についておしゃべりしていた。ズタズタに引き裂かれ、雨で駄目になった哀れな泣き笑いの顔は、園亭の入り口のところにもたせかけてあった。真っ赤な涙をたたえたその涙目だけが、まだはっきり認められた。「彼が人間だった

らね、おじいちゃん」と、アンニは言って、泣き笑いの顔を指さした。「お墓に葬られなくっちゃならないじゃない？

彼は死んだんだから。」「そうなるだろうね」と、祖父は言った。「ゲルデス牧師がおごそかな説教をするだろう。」「ウヒャ」と、メータは言って、すぐアンニを黙らせたが、彼女は満足のあまり、その場で飛んだり跳ねたりした。「ねえ、騒ぐのはやめて」と、ドーラは言った。

少女たちは、急いでバターブレッドを食べ、ミルクを飲み干した。メータが口に手を当てて欠伸をすると、アンニも欠伸をした。「それじゃ、寝るかい」と、祖父が言うと、彼女たちは飛び上がり、祖父にサッとキスすると、壊れた泣き笑いの顔を手にした。「それをどうするつもりなんだい。」彼女たちはもう、やぶの間に姿を消していた。

祖父とドーラは、周囲が茂みの園亭の中で、石油ランプに照らされながら静かに座っていた。彼らはもう食事を済ませ、墓の向こうに目をやっていた。赤味を帯びた月が梢の背後に昇り、その光が墓地に降り注いでいた。十字架や玄武岩の墓石、ひびの入った白い円柱、墓の周囲の格子が鈍く光っていた。そのとき、教会の塔の鐘が暗く鳴り響いた。「八時半だ」と、祖父は言った。ドーラは、不安げに立ち上がり、茶盆を取って言った。「もうかたづけましょう。」だが、祖父は言った。「そのままにして、ここにいなさい。このベンチに座って、落ち着くんだ。」彼は、風雪に耐え日焼けした手を彼女の柔らかい腕に当てて、優しく撫でた。ドーラは真っ青になり、キラキラした大きな目で見つめた。「お前が出かける必要はない。彼はいないよ。」「それじゃ、あの男は行ってしまったの？」祖父はうなずいた。「今晚ね。彼はお前にそれを言いたくなかったんだ。まあ、これで彼も少しは気が楽になっただろうよ。」

それから、彼らはまた長い間黙り込んでいた。もやが墓の上をどんよりと漂い、月は赤々と輝き、冷気が大地から立ちのぼり、花が憧れに満ちた甘い香りを振りまいていた。そのとき、急に港の方から、汽船の汽笛が響いてきた。

石油ランプの黄色味を帯びたあたたかい光が、ドーラの青ざめた丸顔を柔らかく照らしていた。祖父は、彼女の横顔を見やった。大粒の涙が、彼女の目から転がり落ちた。「行ってしまった」と、彼女はつぶやいた。「もう小屋に行ってもだめ。どうすればいいんだろう？」「彼はもう行ってしまったんだ。すべてが終わったんだ。」

ドーラは、この墓地が、世界が、涙のヴェールと月夜のもやの中に消えていくような気がした。

「することがいっぱいあるのに、新聞を読んでもなんて、いいご身分なこと」と、メツラー夫人は言った。料理女は、新聞をテーブルに広げ、頭を腕で支えながらかみ込んでいたのだ。彼女は、不機嫌そうにブツブツ言いながら、

レンジのところに戻って行った。メッツラー夫人は、その新聞を折り畳もうとしたが、時計の写真が見えたので、記事を読んでみた。「樹皮葺きの園亭での謎めいた殺人の続報。昨日、ある散歩者が偶然、園亭に近接した草地で、写真のような紳士時計を見つけた。マリー・オルフェルスを殺害した者が犯行現場でそれを無くした公算が大きい。」そんなことはあり得ない。きっと何かの間違いだ。ナンセンスだ。「古風な形態と分厚い作りの金の紳士時計で、文字盤には青い花の飾りがついており、十中八九家宝クラス。裏蓋にはA. M. というモノグラムが刻み込まれている。」確かにこれはあの時計だ。でも、あの時計がこんなところにあるなんてあり得ない。誰かがそこに置いたのかも知れない。すぐゲオルクに……。いやだ、いやだ。彼女は新聞を両手で開き、大急ぎで厨房から出て行った。

「一体どうしたんだろうね」と、料理女は言った。「新聞を私から奪い取って、気が狂ったように読んでるよ。」

「彼女の様子を見た？」と、スージーが言った。「よくあんなに人が変わるものね。」

メッツラー夫人は、新聞を持ったまま、人々の座っているテーブルを縫うように歩いていった。新聞がはためくほど彼女は急いでいた。ヴェールヴィーア軍楽隊は演奏を続け、燈火が木々の間で輝いていた。彼女は立ち止まった。ゲオルクのそばに立っているあの男たちは、一体誰なのだろう？ 彼らは何をするつもりなのだろう？ なぜゲオルクはあんなにペコペコしながら座っているのだろうか？ 彼女は歩き続けた。心臓がドキドキし、それが彼女にはこたえた。あのゲオルクが、そんなことはあり得ない。彼のテーブルにたどり着いたとき、男たちが相変わらずそこに立っていたので、彼女は何を言っているのか分からなかった。やっとのことで彼女は言った。「ゲオルク、話をしてもいい？」だが、男の一人が言った。「今はご遠慮ください。」「私はこの子の母親なんですよ」と、メッツラー夫人は言った。「母親だったら少しくらい構わないでしょう。ゲオルク、大事なことよ。」「あなたがお母さんですか」と、その男が

言った。「それじゃ、この時計はご存じですね？」「もちろん、存じてますわ」と、メッツラー夫人は言った。「でもこれは何かの間違いです。おかしいです。ゲオルクと何の関係があると言うんですか？ なぜあなたたちが干渉するんです？ あなたたちは誰なの？」「どうか少し落ち着いてください。慎んでいただきたいですね。それがあなたの身のためですよ。万事目立たない方がいいんです。私たちは刑事警察の者です。」彼は手を広げて、警察手帳を示した。「私たちは、残念ながらあなたの息子さんを逮捕しなければなりません。どうか落ち着いてください。」「ゲオルク、なぜ黙ってるの？ どうして何も文句を言わないの？」ゲオルクは、ゆっくり彼女の方を見上げた。彼の顔は青白く疲れ切っていて、その眼差しも生気がなかったが、不思議なことに、以前よりも穏やかで緊張がほぐれているように見えた。彼は小声で言った。「ええ、すべてその通りです。それに違いありません。」メッツラー夫人は、椅子に身を沈め、腕をテーブルに載せて頭を埋め、泣き出した。「気をつけてください」と、男が言った。「隣のテーブルの人が見えますよ。」彼はゲオルクの方に身をかがめた。「もうしばらくお母さんと話をする時間をあげよう。」「ありがとう」とゲオルクは言った。二人の男は後ろに下がり、テーブルがなくなり公園がはじまるところまで行って、じっとゲオルクを見つめていた。木々の闇の中から、ヘンリー・オルフェルスとハンス・シュテーンケンが彼らに近寄った。ヘンリーが言った。「どうしたんです。これが適切な処置と言えるんですか？」「そうだよ。彼は母親と話をしているんだ。君たちの処置は見事に適切だったがね。」

ヴェールヴィーア軍楽隊は、飽きもせず『愉快な農夫』のポプリを演奏していた。人々は談笑し、ビールやコーヒ、パイナップルを飲み、ボーイたちはテーブルの間をまめまめしく走り回り、ナプキンを振り動かしていた。湖にはボートが浮かび、木々の上にますます高く昇った月は、赤味を失って明るさを増し、空を光で満たしていた。